民主化進むミャンマーを行く

（岡部一明、『地球号の危機』2013年3月―4月）

ミャンマーの象徴、シュエダゴン・パゴダ。

昨年8月、民主化が進むミャンマー（ビルマ）を調査した。ここ1,2年の変化は大きなものがあるが、軍事政権国家の余韻は残り、得られる情報からは相当の注意が求められる旅だった。各種ガイドブックにも多くの警告があり、1年前にミャンマー取材を行った毎日新聞記者の春日孝之氏も、入国するには記者の身分を隠す必要があり「貨幣研究家」として入り、ネピドーには役人の紹介がないとだめだとか、パスポートチェックされ観光ビザだと追い返されるだけだと言われたが、とにかく車で行くと入れた、しかし政府建物の写真を撮っていると公安に制止され、立ち退かされた、などと書いている（春日孝之『未知なるミャンマー』毎日新聞社、2012年）。2008年9月には、ヤンゴンの民主化デモをビデオ取材していた日本人ジャーナリスト長井健司さんが国軍兵士に射殺されている。山岳部・国境近くの少数民族地域では依然として武力紛争が続いており、入れない。入れる地域についても2週間程度かけて特別許可をもらう、専門ガイドをつける、など困難さを伴う。大学は、国際連携を恐れてか外国人入構内禁止。鉄道、橋、政府建物、産業施設などの撮影も禁止されている（撮ってしまったが）。

今回の私の旅行でも、ビザ取得の段階から、宿泊先を含めて詳細な旅行日程の提出を求められ、緊張感をもってミャンマー入りした。

ヤンゴンに着く

ミャンマーの元首都で最大都市ヤンゴン（ラングーンから名称変更、人口500万）に降り立つと、ジメッとした空気が体を包む。暑さは日本の夏と同じくらいだが、湿度が違う。雨季の真っただ中で雨が多い。もちろん熱帯特有のスコール（夕立）なのだが、夕立が1日10回来る、といった感じだ。時に土砂降りの集中豪雨型。街全体、周囲の建物、自分の体全体に湿気が宿る。ホテルのベッドに寝てもジトッと湿気がある。干した洗濯物が乾かない。半乾きの洗濯物は干しておくと返って湿ってしまう。

街の中心スーレー・パゴダ、ビルマの象徴シュエダゴン・パゴダ、国立博物館、ヤンゴン港、中央駅、中央市場と、まずはひたすら歩く。一応観光スポットを目標にするが、その途中で街路の生活に触れることが目的だ。そして街全体から湧き出るエネルギーを摂取する。私の旅のやり方だ。

確かにミャンマーは貧しい。隣国タイと比べてもかなりの落差がある。街路の衛生状態がよくない。「夕立」の後、水没して通れなくなる歩道もある。空港から都心へは、鉄道はもちろんバス便さえなかった（高いタクシーに乗せられた）。

2007 年の僧侶たちの民主化デモの際、日本人ジャーナリストの長井さんが射殺された現場に行った。街の中心スーレー・パゴダに近い十字路の角。路面の写真を撮らせて頂いた。気骨あるジャーナリスト魂が消えた聖なる場所だ。付近は交通が激しく危険で、この聖地で車に轢かれて死ぬなんていうんでは目も当てられないぞ、と思いながら近づいた。

レートがよいという中央市場（ボージョアウンサン・マーケット）周辺で闇ドルの交換をする。別に違法行為というわけではない。ガイドブックにもそうせよと書いてある。アジア・アフリカ諸国に両替のブラックマーケットは珍しくないが、ミャンマーの場合、レートが 100 倍以上違う（公式レートが 1 ドル＝ 6.4 チャット、実勢レートが 1 ドル＝ 800 チャット程度）。だれも公式レートでは交換しない。皆ブラックマーケットで交換する。闇ドルレートが通常の交換レートであると考えればよい。（が、これはガイドブックの情報が古かったようで、 2012 年 4 月から銀行でも実勢レートで交換できるようになっていた）。ちなみに、ミャンマーではクレジットカードがまったく使えない。トラベラーチェックも使えない。クレジットカードのＡＴＭで現地通貨を引き出すのが最も簡単・安全な現地通貨の通達法なのだが、それができない。国外から持ち込んで使えるのは米ドルの現金だけ。しかも折り目のない真新しいドル札だけ、という異様な金融環境だった。

比較的自由な報道

意外だったのは、地元の新聞が比較的自由な報道をしていたことだ。ビルマ語は読めないので英字紙だけの話になるが。ヤンゴンで手に入る英字紙は週刊の The Myanmar Times と日刊の New Light of Myanmar 。後者は明確

に政府系で、政府の何とか会議の報道など、会議場の写真が多い新聞だ。あとは、国内問題に関係なさそうな外国のニュース記事が多い。基本的にミャンマーでは民間による日刊紙発行が許されていないのだ（今後変わる可能性）。

民間の英字紙 The Myanmar Times の報道がよかった。この週（ August 6-12, 2012 ）のトップ記事は、マンダレーで政府批判コメディーを続けてきた 3 人組グループ、マスタッシュ・ブラザーズについて。投獄経験のある 2 人の大きな写真入りだ。 1996 年、スーチーさんの家の反政府集会で軍人批判コントをやったことで 2 人は懲役 7 年に処された。軍事政権の抑圧の象徴として国際的な支援の輪が広がった。出所後も公演を禁じられたが、家での非公式コメディー演技を外国人観光客向けに英語で続けた。 2007 年の民主化デモでも逮捕されるなど弾圧は続き、現在でも自由な公演が許されない。記事はこの状況の改善を訴えている。

同じ 1 面の 2 番目の記事は、大学の自治について。政府が国会に提出した高等教育法案が国民民主連盟（ＮＬＤ，スーチーさんの民主化団体）などの反対で廃案となり、大学の自治を明記した新法案が国会の法案委員会などから出される見込みと報じている。その他、ラカイン州の少数民族抑圧の問題、カチン州の武装勢力支配地域難民への寄付が始まったこと、消費者保護団体設立の動き、工場の解雇問題でＩＬＯ担当者の査察が入った件、ＮＧＯによるマイクロファイナンス活動、資源保護活動、起業支援活動などが、事故や水害、経済動向などの一般記事の間で自由な筆致で報じられている。日本関係ではミャンマー国内における日本財団の援助活動とか、防衛庁の防衛白書で中国の軍拡が批判されたとか、退職後、途上国ボランティアを志す日本人が増えている、とか。（私も将来の進路として海外ボランティアを考えてなくはないので、なかなか心憎くかった。）。

情報省が、事前検閲を受けずに記事を出した 2 週刊誌を発刊禁止処分にした、という記事もあった。「事前検閲制度を廃止する動きもあるが、現在のところではまだ残っているので注意してほしい」という同省報道監視副局長のコメントが載っている。事前検閲制度の廃止の方向が読み取れる。実際、私の出国直後（ 8 月 20 日）、同じ副局長が、ミャンマーにおいて 50 年ぶりで事前検閲を廃止するという発表を行った。

The Myanmar Times は 2000 年、オーストラリア人とミャンマー人共同出資で発刊されたバイリンガル紙。ミャンマー語の方は 2 万 5000 部、英語版は 3000 部出ている。ビルマ人の共同出資者ソニー・スエは 2004 年、事前検閲に従わなかったかどで懲役 16 年に処されている。しかし一般的には、同紙はこれまで政府系に近いとされて

きたので、今回見た紙面の内容にちょっと驚かされた。

秘密首都ネピドーへ

ヤンゴンから北部の都市マンダレーを目指す。800キロ離れたマンダレーにバスで１日で行くのは大変だ。途中で中継ぎできるところはないか、ガイドブックで調べると英語のガイドブック（『Lonely Planet』）の方に首都ネピドーの解説があり、行き方も書いてあった（ヤンゴンからのバス便がある)。「軍事政権の秘密首都」ネピドーは旅行者は入れないと聞いていたし、日本語のガイドブック（『地球の歩き方』）にはこの町の項目自体がなかった（帰国後、2012年秋発行の2013-4年版『歩き方』になってこの項目が入った)。入れるなら行ってみよう。いきなりだが、冒険することにした。

「秘密首都への潜入」、とドキドキしたが、長距離バスターミナルで待つと、ネピドー行きのバスはごく普通にやってきて一般市民がたくさん乗り普通に出発した。切符を売る人も何も怪しんだりしなかった。

ヤンゴン・ネピドー間の道は、片側２車線の立派な高速道路。民家もないなだらかな丘陵地帯をまっすぐに通っている。車もあまり走ってないのでバスはスピードを出す。みずみずしい熱帯の緑を見るのはいいが、単調な風景は困る。

６時間ほどでネピドー着。田園地帯に拡散した市内をぐるっと回るように進んで、中央市場付近のバスターミナルに着いた。建物は新しいがごく普通の庶民の市場だった。そうか、軍事政権の秘密首都でも当然に一般民衆も暮らしているんだ、とやや安心する。

都市計画はしっかりしていて、市場や庶民の商店の地域、官庁街、住宅街、ホテル街などが分かれている。とにかく歩く。目立たぬよう写真も撮る。官庁街の方にも近づいてみる。だだっ広いので流しのバイク・タクシーも適宜利用する。軍人や官僚が入るのだろう、４階建の集合住宅は新しくきれいだ。政府の建物らしきものも新しく豪華だ。緑が多い。道路は広くゴミはあまり落ちていない。ヤンゴンの混雑とは大違いだ。

「噴水ガーデン」という公園が街の中心部にあり、観光スポットにもなっている。入園料以外に、その５倍、1000チャット（100円）の写真撮影料を取られた。歓迎だ。これなら大手を振って写真を撮れる。園のすぐ東隣にネピドーの開発を行うネピドー開発

委員会の立派な建物があった。高台の展望台に登ると、市内がよく見え（ほとんど緑だが）、森の彼方に国会議事堂らしい建物も見えた。

市場近くに何軒かネットカフェもあり、インターネットが自由に使えた。「ネピドー潜入」の現地報告メールを友人たちに送る。ネピドーの市内地図は入手できないが、グーグルにアクセスすれば地図が見られる。それをプリントアウトして持って歩けば、どんな所の市内地図でも確実に持てるということだ。ネット時代の新しい旅のノウハウだ。

ビザ申請時に出した旅行日程にネピドーは入っていない。夜行バスで即マンダレーに向かった方がよい。バス出発時に、私だけパスポートの提出を求められて少し緊張した。車掌がどこかの事務所に持っていき登録されたようだ。

多元社会ミャンマー

マンダレーには朝暗いうちに着いた。すでにイスラム教徒たちの礼拝がはじまっている。朝4時起きして皆がモスクに祈りに行くらしい。あちこちから物悲しいモスクのスピーカー音楽（祈り）が流れてくる。そう、ミャンマーにはかなりのイスラム教徒がいるのだ。インド系の顔立ちも多い。ヒンズー寺院もある。中央アジアと同じように、ビルマは東アジアと西（南）アジアが混交する世界なのだ。（政府統計では、イスラム教4％、ヒンズー教0.5％、インド系人口は2％だが、ミャンマーでは1983年以来国勢調査が行われておらず、実数はもっと多いと思われる。少数民族全体では政府統計でも人口の3割。）

仏教徒も負けてはいない。パゴダからイスラムに似たスピーカー音楽が流れる。紅紫の袈裟を来たお坊さんたちが朝の托鉢に出かける。僧列にかなりの数の少年僧が混じる。タイやラオスでも見た光景だが、かつて近代教育の普及以前、仏教寺院での修行が青少年教育の場だったに違いない。

西部のラカイン州などでは深刻な民族・宗教対立が起こっているが、少なくとも街では、そうした多様な人々が平穏に暮らしているという印象を受ける。インドと同じような多民族、多宗教の社会秩序を感じる。第二次大戦時、日本はこんな遠くまでよく攻め込んできたもんだ、と思う。その野望に驚くが、しかし、偽りの「八紘一宇」では、所詮こんな多元社会は統治できなかったろう。

しかし、イスラムはマイノリティのはずなのに、モスクから朝4時、5時に大音響のスピーカーで祈りをあたりに流しまくっている。よく周辺から苦情が来ないものだ、と感心する。

古都マンダレー

ミャンマー第2の都市マンダレー（人口100万）は古都で、日本で言えば京都だ。ミャンマー仏教文化の中心都市であり、 7000 の寺院があり、人口の三分の一が僧、尼僧だという。最後のビルマ王朝（コンバウン朝）の王宮「マンダレー王宮」が街の北東部にある。立派なお堀を張りめぐらした約2キロ四方の広大な王宮。 1885 年、南部から徐々にビルマを植民地化していったイギリスにより陥落させられた。王はインドに追放され、大量の財宝がイギリスに持ち去られた。以後、英軍の要塞に使われた。第二次世界大戦でビルマを占領した日本軍も、この王宮跡を兵站基地に使った。マンダレーの東 70 キロ、高原の避暑地メイミョーに日本軍司令部を置き、インパール作戦など戦争末期の日本軍の無謀な戦いの拠点となった。

ミャンマーでは、外国人は大学内に入れない。それはわかっていたが、一応、マンダレー大学に行ってみた。さほど大きくない大学だが、夏休みで閉鎖されていた。正門ドアのところまで歩み寄ると、警備の男が来て、ダメダメというような身振りをした。横に抜けるそぶりでこっそり写真を撮る。ミャンマーの大学はキャンパスの中に寮などがあって、そこに住むようになっている。学生や教職員の宿舎らしき建物の敷地は通れたので、道の外れまで歩いて行った。いずれも簡素な建物。寮では学生たちが元気よく騒いでいるようだった。

濡れきったビルマ南部低地から来ると、乾燥したマンダレーの大気が心地よい。ホテルの部屋も乾燥して清潔だし、洗濯物もすぐ乾く。特に今年は、雨季にもかかわらず、雨の降らない日がかなり続いていたという。平年でも年間降雨量は、ヤンゴン2876mmに対してマンダレー 897mm 。ベンガル湾からの南西モンスーンは、西部のアラカン山脈にぶつかり大量の雨を降らせ、その先のビルマ内陸平原には乾いた熱風が吹く。マンダレー周辺には、イラワジ川から遠ざかるとサバンナのような風景が広がる。水田はなくなり、畑もまばら。潅木が所々はえる荒れた大地に草原が広がる。地図帳で調べると確かにこの地域はサバンナ気候に分類されていた。

少数民族地域に向かう

マンダレー近くの観光地パガンに寄り（省略）、 次いで東部、シャン州の州都ダウンジーへ向かう（約 400 キロ）。 いよいよこれから少数民族の地域に入るのだ。まずは、ミャンマーで最も数の多い少数民族であるシャン族

のシャン州だ。500 万人で全人口の９％。州面積も国土の 23 ％を占め最大の州になる。シャン州東部では、独立を求めてシャン州軍（推定兵力１万）が現在でも山岳地帯で活動し、一定地域を支配下においている。奥地には入れないが、平野部に近いインレー湖付近や州都タウンジーなどには比較的簡単に入れる。

宿までやってきたバスは「エアポート・リムジン」と英語で書いてある。昨日も見たバスで、この辺に空港があるのか、などと思っていたが、単に日本の中古バスだったようだ。ミャンマーのバスやトラックはほとんどが日本からの中古輸入品だ。塗装も塗り替える必要はないのだろう 、「ひまわり保育園」とか 「(株) ○○建設 」「ＸＸ交通」などという表示がそのまま。日本人というのは変なもんで 、「空港バス」などではなく 、「 Airport Limousine 」などと読めもしない英語を車体に書く場合がある。それでつい、現地の空港バスと勘違いしていたのだ。

バスはミャンマーの中央平原を横切り、第二次大戦の激戦地メイティーラの街を通って、東部山岳地帯に入った。次第に前に行ったラオスの山岳風景に似てくる。急峻な山を削って道路が走る。至る所にがけ崩れの跡がある。山また山の旅だ。「分け行っても分け行っても青い山」という山頭火の句を思い出す。日本の山も深いが、しかし、登っていき峠を越せば下りになり、やがて日本海に昔の人も知っていた。しかし、この東南アジアの山はどこまで続くかわからない。一旦入ったら出られないような深さがある。究極的にはヒマラヤやチベット高原にも連なっているのだ。

峠を登っては下り、を繰り返し、何度か目かの峠を越えたところで、澄みわたった緑の平原が突然眼下に広がった。桃源郷のような美しさに息を飲む。ああ、少数民族の山岳地帯に来たのだ、という思いがわいた。

隣の座席の英国青年も含めて、かなりの観光客がカローで下りた。トレッキングなどの起点になる観光地だ。さらにメジャーな観光地、インレー湖の付近で欧米人全員が下り、外国人旅行者で残ったのは私だけになった。終点のシャン州都タウンジーまで行く。代表的な少数民族州に来てその州都まで行かないことには申し訳が立たないだろう。

シャン族の州都タウンジー

山の上にずいぶん家が建ってるな、と下から見ていたが、何とそれが州都タウンジーだった。人口 20 万人でそれなりの地方都市だが、この立地には驚かされる。標高 1400 メートル。かなり涼しい。インレー湖のある盆地を望む高台にある。山岳民族シャンはこれほどまでに平地を避けたのか。インレー湖付近と違いまったく観光化されてないが、この高原の街はちょっと整

備すれば素晴らしい観光地になりそうだ。（下記写真：タウンジーの街）

翌日、シャン州文化博物館などを見学。民族衣装や民芸品も飾られているが、 1947 年のビルマ政府と少数民族の停戦協定（パンロング協定）の資料が多く展示され、ビルマ統一国家への編入が強調されている。

シャン族といっても、ビルマ族との違いはわからない。顔立ちも同じだし、服装も同じに見える（ずぼんとＴシャツ姿の人も多い）。 街の生活や衛生状態も中央部のビルマ族の街と同じ。アメリカの多民族国家は人種的に異なる人々による多民族国家だが、アジアの多民族国家はそれとは違う。

湖のかたわらに住むインダー族

下の平地部の観光地インレー湖にも足を伸ばす。インレー湖周辺には、少数民族州の中の少数民族、インダー族が住んでいる。乗り合いトラック便で１時間ほど平野部に下る。標高 880 メートル。山の上のタウンジーとは 500 メートルほどの標高差があって少し暑い。

ニュアンシュエの街で下りて、湖の方に歩くと、水田地帯が広がっている。穂が垂れる水田もあれば、稲刈りが終わって日本と同じような稲わら干しのある田んぼも。日本にもかつてあったような脱穀機が稼働して、 10 人くらいの村人が脱穀作業に余念がない。いくつか集落を通る。東南アジアの村では、特に川に近いところでは高床式の住宅が多い。湖のほとりに住むこの辺のインダー族の家々もかなり長い柱に支えられた高床式だ。屋根や壁は恐らくヤシの葉で葺いた簡素なもの。子どもたちが寄って来て歓声をあげる。こんな小さな村まで外国人が来ることはないのだろう。驚いた顔が固まり私を凝視続ける子もいる。

数キロ歩けばインレー湖にぶつかるはずなのだが、甘かった。水田はしだいに池のようになり、湿地帯になった。道がない。先の方には建物も見えるのだが。

立ち往生していると、どこからともなく船がやってきた。日本の川船のよ

うな小さい舟で、インダー族の青年が漕いでいた。この辺ではもう舟で移動する以外ないらしい。言葉は通じないが、「こんなとこに来ても道はないんだよ。舟で連れてってあげるから」と言っているようだ。ありがたく好意に甘える。より水の深い（湖に近い）方を大回りして先ほど通った集落の方に帰る。湿原地帯の中にあった建物は、道でなく、こうして舟でたどりつく建物だった。藻や水草が繁茂する沼地が続く。インレー湖は明瞭な岸がなく、こうして徐々に水田から湿地、沼地、湖と変遷していくらしい。

青年は、繁茂する水生植物の上に乗り上げたりししながら、小舟をうまく漕いで行く。インダー族独特の足でオールをこぐ漕法も目前で見ることができた。「すごい、すばらしい」と歓声を上げると、誠実そうな青年ははずかしそうにほほ笑んだ。道のある集落まで来て下ろしてくれた。お礼に若干のチップを渡したが、青年はそんなのを求めていなかったようだった。

ヤウンシュエは、インレー湖見物の拠点となる観光町だが、重要な文化遺産もある。「ブッダ博物館」だ。中には仏像類があるだけだが、実はこれはシャンの有力公国の宮殿だった。宮殿博物館、王子博物館、シャン領主博物館その他名前を頻繁に変更されながらシャン文物を展示していたが、 2008 年に中身が取り払われ、単なる仏教博物館にされてしまった。街のはずれの博物館にたどり着いたのは夕方。閉まっていた。が、中を見る気は毛頭ない。レンガとチークの建築、「宮殿」と言うより「館」といった建物を外から見られただけで充分だった。

ヤウンシュエ公国はシャン族の中で最も勢力のあった公国で、その最後の王子サオシュエタイクは 1948 年のビルマ独立に際し、ビルマ大統領にも指名されている。 1962 年のネ・ウィンの軍事クーデター時に捕らえられ、その後獄中死。息子のミーヤウンギーはクーデター時に殺害された。妻サオ・ハーム・カオは自治を求めるシャン州軍の創設に加わった。

モン族、カレン族の州へ

先を急ごう。乗り合いトラックや鉄道に乗って、ビルマ中央平原に戻り、そこから南下し、ペグーを経て南部のモン族の州都モーラミャインへ、さらに隣のカレン族の州都パアンへ。モン族は公式人口 100 万とあまり多くなく（モンの民族組織は 400 万と主張）、モン州も 1 万 2000km^2 で、国土の

５％を占めるにすぎない。しかし東南アジアにおいてモンはクメールと並ぶ古い民族で、タイ・ビルマ地域に大きな影響を与えてきた。丸いビルマ文字はモン文字から生まれた。この地に上座部仏教（小乗仏教）を広めたのもモンの諸王国だ。ビルマの国家的象徴とも言うべきヤンゴンのシュエダゴン・パゴダをはじめミャンマーの歴史的建造物の多くはもともとモン王国の建造物だった。建国以来のビルマ族を中心とした国づくりの中でモンの民族覚醒も強まり、モン人民戦線（ＭＰＦ）、1962 年のクーデター後は新モン国家党（ＮＭＳＰ）が武装闘争を続けてきた。 1996 年に停戦協定が合意されたが、それ以後も単発的な爆破事件などが起こっている。

一方のカレン州は、 1948 年以来「世界一長い内戦が戦われている地域」と言われる。他の多くの少数民族が停戦に応じる中、カレン族だけは、停戦協定に合意していない。今でも州都パアン付近以外は外国人立ち入り禁止になっている。カレン族はもともと強い民族意識をもっていたわけではない。しかし植民地時代、イギリスが、カレンのキリスト教化を進め、イギリス流の教育をほどこし、植民地支配に活用した。ビルマ人支配の先兵に活用されたわけで、それがビルマ族との間に対立感情を生んだ。独立後ビルマ族中心の国づくりが進む中で、対抗意識を募らせた。

これら重要な少数民族地域に足を踏み入れられたのは幸運だった。詳しい報告は省略するが、モン族、カレン族もまた、旅行者にはビルマ族と区別がつかない。街の様子もビルマの普通の地方都市だ。仏教徒が多く、立派なパゴダがあり、朝は僧侶の托鉢の行列が見られる。イスラム寺院やヒンズー寺院が見られるのも他のビルマの街と同じだ。やはり旅行者として回るだけでは問題の深層に迫るのは難しい。

ＮＬＤの本部へ

最大都市ヤンゴンに戻ってきて最後の日、いろいろ冒険をすることにした。まずスーチー氏らの民主化組織「国民民主連盟」（ＮＬＤ）の本部訪問を試みる。回りは公安が固めているなどと聞いていたので、近くに寄れないと思っていた。最後だから何があってもいいというつもりで行く。

タクシーの運転手に住所を告げたが、よく理解しない。やむを得ず言う。

「ＮＬＤの本部事務所だ。」

「ああ、あそこか。」

運転手の反応が意外だった。彼はそこをよく知っていた。ならそうと早く行ってくれればいいのに、というような風情で嬉々として車を発進させた。「ＮＬＤはそんなに人気ある（popular）のか。」と聞くと、「そうだよ、みんな知ってる」という返事。

ＮＬＤ全国本部は、地方で見た支部事務所と同じように 3 階建ての粗末な建物だった。しかし、まわりには兵士

や警察の警備もなく、自由に立ち寄れる雰囲気。玄関前には屋台の売り場があり、資金集めのためなのだろう、スーチーさんの絵が入ったＴシャツ、ポスター、マグカップその他を売っていた。いくつかを買い、販売の女性にカメラを向けるとポーズをとられてしまった。しまった、こんな感じなら、正式にしかるべきインタビューの予約を入れておけばよかった、と後悔する。

ＮＬＤ本部

スーチーさんの家の前

民主化運動の拠点となるヤンゴン大学には入れなかった。「外国人入構禁止」の看板があり、守衛に止められた。しかし、その近くにあったスーチーさんの自宅前には行けた。かつて自宅前通りは通行禁止にされ、バリケードが築かれ、公安が見張っていたという。しかし、今は車の交通も多く、バリケードも監視もまったくなかった。門にＮＬＤの旗や看板が掲げられ、塀には鉄条網があってやはり要塞のようだったが、今は活動家たちが中から守っているのだろうか。

近くには韓国大使館などいろいろ外国公館が並ぶ。スーチーさん宅周辺にあえて居を構え、軍事政権の弾圧にプレッシャーをかけているのだろうか。堂々とした白亜のアメリカ大使館の建物も近くにあった。周りを銃を持った兵士が固め、スーチーさんの家よりずっと恐ろしい。カメラを取り出す気にもなれなかった。

ミャンマータイムズ社

最後に、自由な報道で感心したミャンマータイムズ（冒頭参照）の本社を訪れた。古い新聞を入手して現在の新聞と比べ、それで民主化レベルの検討を行おうと思ったのだ。直接の取材が難しい社会では有力な分析手法だ。

古い新聞が見たい、買いたい、と言うと、マーケッティング担当の英語を話す女性が出て来た。残っている保存紙を探し 2007 年 12 月と 2010 年 5 月の新聞を提供してくれた。確かに昔の新聞は政府の公式発表のような記事が多い。

昔の新聞と比べて民主化の度合いを調べるという方法に興味をもち、積極的に協力してくれる。「昔の新聞にはあまり民主化の記事がないです」「あ、この記事を書いた人はやめてしまったよ」「いいえ、別に政府系の人だったんじゃないけど」「あなたは観光で来たの？」「どの街に行ったの？」といろいろ質問も飛ぶ。「今の新聞はいろ

いろ反政府的なことも書き、少数民族の問題なども書いているのでえらい」と誉めると素直に喜んだ。長話はできないが、ついでに「あなたはビルマ族だよね」と聞くと、

「私はカレン族」と答えた。

意外だった。確かにカレン族の人には高学歴の人が多いと聞いていたが、そういう人が新聞社でも働いているのだ。「そうですか、私もカレン州の州都パアンにも行きましたよ。」

「雨がたくさん降ってたでしょう。」と彼女。確かにパアンはヤンゴンよりさらに雨が多かった。

彼女は小さい頃はカレン語を話していたという。マーケッティングが担当なので記事は書かないそうだ。「でも、民主化が進めば、あなたも少数民族のことなど自由に書けるかもね」と言って新聞社を出た。

何だか少し興奮した。意外といろんな人が自由に発言している。今回の旅でももう少し、突っ込んだインタビューをした方がよかったかも知れない。できたのかもしれない。「軍事政権の国」に用心しすぎたか。状況は変わったのか。が、泣いても笑ってもこれがミャンマー最後の日。次回はもう少し交流的な調査をしようと決めた。